（試験研究課題年次別解説集様式４号：継続課題用）

河口･沿岸域におけるアユ仔稚魚期の資源生態研究

（予算区分　県単　研究期間　平成 18～21 年度）

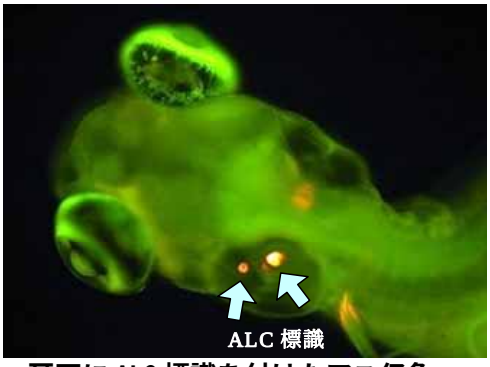
担当：富士養鱒場

【研究の背景とねらい】

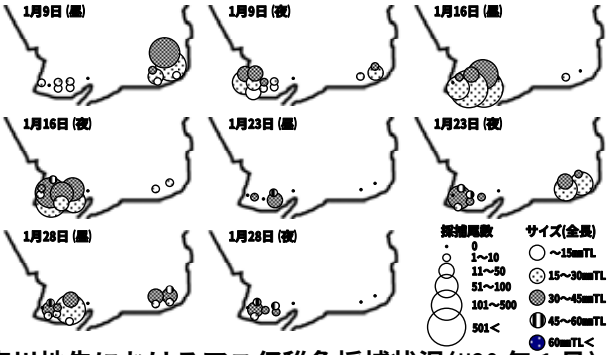
アユは本県内水面漁業の最重要魚種であり、漁協により資源量維持のための種苗放流も盛んに行われています。しかし、アユの好不漁は天然稚魚の遡上変動の影響が大きく、年により著しい不漁となるため、資源の安定化が望まれています。遡上量が変動するのは、冬季に海域で生活する仔稚魚期の生残が不安定なためと考えられています。そこで、不明な点の多いふ化から遡上までの仔稚魚期を中心に、河川及び沿岸域の資源生態、生息環境等を調査して資源の再生産機構や減耗の原因を解明し、資源の安定化を目指します。

【これまでに得られた成果】

・沼津地区の古宇川では、流下時のふ化仔魚がハゼ類等の魚類により捕食されており、その捕食量は最も多かったスミウキゴリで流下仔魚量の約 0.7%と推定されました。
・古宇川河口周辺の砂浜浅瀬では、仔稚魚は流れが比較的穏やかで水深が浅すぎない砂浜の砕波帯で多く出現しました。
・天然仔魚の流下時期と海域での仔稚魚出現時期から、砕波帯で採捕された仔稚魚のほとんどは古宇川以外の河川（狩野川等）に由来すると推察されました。
・海域のアユ稚魚は、採捕時期により栄養状況が異なることがわかりました。
・ALC で標識した発眼卵 500 万粒を古宇川に放流しましたが、標識魚は流下直後に少数が再捕されただけであり、河口域がほとんどない河川環境が影響したと推察されました。



耳石に ALC 標識を付けたアユ仔魚



古宇川地先におけるアユ仔稚魚採捕状況(H20 年 1 月)

【期待される成果】

・ 良好な河口域があり、他河川の流下仔魚の影響を受けにくい河川とその周辺海域で調査を行うことにより、産卵・流下時期と海域での出現量、遡上量との関係などが明らかになり、海洋生活期における減耗要因を把握することが可能になります。
・ 同河川で発眼卵 ALC 標識放流を行うことにより、発眼卵放流の効果を把握することができます。

【今後の計画】

課題	19 年度	20 年度	21 年度
仔稚魚期の生態に関する研究	○	○	○
発眼卵放流の効果に関する研究	○	○	○

（作成平成 21 年 4 月）